

日蓮大聖人御書全集

やくおうほんとかくいししょう

薬王品得意抄

新版
524
〜
531

やくおうほんとかいしよう

薬王品得意抄

ぶんえい ねん

文永2年 ('65)

44歳 さい

やくおうほん

たいい

やくおうほん

だいしち

かん

この薬王品の大意とは、この薬王品は、第七の巻、

にじゅうはつぽん

なか

だいにじゅうさん

ほん

だいいち

かん

二十八品の中には第二十三の品なり。この第一の巻に

じよほん

ほうべんぽん

にほんあ

じよほん

にじゅうはつぽん

じよ

ほうべんぽん

序品・方便品の二品有り。序品は二十八品の序なり。方便品

にんきほん いた

はつぽん

しやう

にじようさぶつ

あ

より人記品に至るまでの八品は、正には二乗作仏を明かし、

ぼう

ぼさつ

ほんぶ

さぶつ

あ

ほつし

ほうとう

だいば

かんじ

傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす。法師・宝塔・提婆・勸持・

あんらく

ごほん

かみ

はつぽん

まつだい

ほんぶ

しゆぎやう

やう と

安楽の五品は、上の八品を末代の凡夫の修行すべき様を説

ゆじゆつぽん

じゆりやうほん

じよ

ふんべつくだくほん

くなり。また涌出品は寿量品の序なり。分別功德品より

じゅうにほん

しょう

じゅうりょうほん

まつだい

ほんぷ

ぎょう

よう

十二品は、正には寿量品を末代の凡夫の行ずべき様を、

ぼう

ほうべんほんとう

はつぽん

しゅぎょう

よう

と

傍には方便品等の八品を修行すべき様を説くなり。しかれ

やくおうほん

ほうべんほんとう

はつぽん

じゅうりょうほん

しゅぎょう

ば、この薬王品は、方便品等の八品ならびに寿量品を修行

よう

と

ほん

すべき様を説きし品なり。

ほん

じゅう

たと

あ

だいいち

たいかい

たと

この品に十の喩え有り。第一は大海の譬えなり。まず

だいいち

たと

もう

なんえんぶだい

にせんごひやく

かわ

第一の譬えをほぼ申すべし。この南閻浮提に二千五百の河

さいくやに

ごせん

かわ

そう

してんげ

にまん

あり、西俱耶尼に五千の河あり、総じてこの四天下に二万

ごせんくひやく

かわ

しじゅうりないしひやくり

いちり

いっちよう

五千九百の河あり。あるいは四十里乃至百里・一里・一町・

ひとひろとう

かわ

あ

しよが

そう

一尋等の河これ有り。しかりといえども、この諸河は総じ

しんせん

たいかい およ

ほっけいぜん

けごんぎよう

あごんぎよう

て深淺のこと大海に及ばず。

法華已前の華嚴經・阿含經・

ほうどうきよう

はんにやきよう

じんみつきよう

あみだきよう

ねはんぎよう

だいにちきよう

方等經・般若經・深密經・阿弥陀經・涅槃經・大日經・

こんごうちようきよう

そしつじきよう

みつごんぎようとう

しやかによらい

と

金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦如来の説くところ

いっさいきよう

だいにちによらい

と

いっさいきよう

あみだによらい

の一切經、大日如来の説くところの一切經、阿弥陀如来の

と

いっさいきよう

やくしによらい

と

いっさいきよう

説くところの一切經、薬師如来の説くところの一切經、

かこ げんざい

みらい

さんぜしよぶつ

と

いっさいきよう

なか

過去・現在・未来の三世諸仏の説くところの一切經の中に、

ほけきようだいいち

たと

しよきよう

たいが

ちゆうが

しやうがとう

法華經第一なり。譬えば、諸經は大河・中河・小河等のご

ほけきよう

たいかい

とう

と

とし、法華經は大海のごとし等と説くなり。

かわ

すぐ

たいかい

じゆう

とくあ

いち

たいかい

ぜんじ

ふか

河に勝れて、大海に十の徳有り。一に大海は漸次に深し、

かわ 河はしからず。二に大海は死屍を留めず、河はしからず。三 さん

たいかい 河はしからず。二に大海は死屍を留めず、河はしからず。三 さん

たいかい 河はしからず。二に大海は死屍を留めず、河はしからず。三 さん

に大海は本の名字を失う、河はしからず。四に大海は一味 いちみ

かわ 河はしからず。五に大海は宝等有り、河はしからず。 かわ

なり、河はしからず。六に大海は極めて深し、河はしからず。七に大海は廣大無量 こうだいむりよう

ろく たいかい 六に大海は極めて深し、河はしからず。七に大海は廣大無量 こうだいむりよう

六に大海は極めて深し、河はしからず。八に大海は大身の衆生等有り、河は かわ

かわ 河はしからず。八に大海は大身の衆生等有り、河は かわ

なり、河はしからず。九に大海は潮の増減有り、河はしからず。十に じゆう

く 九に大海は潮の増減有り、河はしからず。十に じゆう

しからず。十に大海は潮の増減有り、河はしからず。十一に じゆう

たいかい 大海は大雨・大河を受けて盈溢無し、河はしからず。 かわ

大海は大雨・大河を受けて盈溢無し、河はしからず。 かわ

ほけきよう 大海は大雨・大河を受けて盈溢無し、河はしからず。 かわ

この法華経には十の徳有り。諸経には十の失有り。こ い

きよう この法華経には十の徳有り。諸経には十の失有り。こ い

の経は漸次深多にして五十展転なり。諸経にはなお一も いち

なし、いわんや、二・三・四乃至五十展転をや。河は深け

れども大海の浅きに及ばず。諸経は、一字・一句・十念等

をもつて十悪五逆等の悪機を撰むといえども、いまだ一字

一句の随喜五十展転には及ばざるなり。この経の大海は

死屍を留めずとは、法華経に背く謗法の者は、極善の人な

りといえども、なおこれを捨つ。いかにいわんや、悪人な

るの上、謗法をなさん者をや。たとい諸経を謗ずといえど

も、法華経に背かざれば必ず仏道を成ず。たとい一切経

を信ずといえども、法華経に背かば、必ず阿鼻大城に墮つ。

ないし だいはち たいかい だいしん しゅじょうとう

乃至、第八に大海は大身の衆生等ありというは、大海に

まかつだいきよとう だいしん しゅじょう あ むけんじごく もう

は摩竭大魚等、大身の衆生これ有り。無間地獄と申すは

じゅうこうはちまんゆじゆん じごくやく もの むけんじごく お いちにん

縦広八万由旬なり。五逆の者、無間地獄に墮ちては一人に

かなら じゅうまん じごく しゅじょう じごくやく もの だいしん しゅじょう

て必ず充滿す。この地獄の衆生は五逆の者、大身の衆生

しよきよう しようが たいが なか まかつだいきよ な ほけきよう

なり。諸経の小河・大河の中には摩竭大魚これ無し。法華経

たいかい あ りんぎやく もの ぶつどう じよう

の大海にはこれ有り。五逆の者、仏道を成ず。これ実には

しよきよう な しよきよう あ い じつ

諸経にこれ無し。諸経にこれ有りと云うといえども、実に

みけんしんじつ ゆえ いちだいししようぎよう そら てんだいちしゃ

は「未顕真実」なり。故に、一代聖教を諳んぜし天台智者

だいし しやく い たきよう ぼさつ き にじよう

大師、釈して云わく「他経は、ただ菩薩にのみ記して二乗

に記せず。ただ善にのみ記して悪に記せず乃至今経は皆記す」等云々。余はしばらくこれを略す。

だいに

やま たと

じつぼうせんとう

やま なか

しゅみせんだいいち

第二には山に譬う。十宝山等とは、山の中には須弥山第一

じつぼうせん

いち

せつせん

に

こうせん さん

かりらせん

なり。十宝山とは、一には雪山、二には香山、三には軻梨羅山、

し せんしようせん

ご

ゆけんだせん

ろく

めにせん

しち

四には仙聖山、五には由乾陀山、六には馬耳山、七には

にみんだらせん

はち

しゃからせん

く

しゅくえせん

じゅう

しゅみせん

尼民陀羅山、八には斫伽羅山、九には宿慧山、十には須弥山

さき くせん

しよきようしよせん

いちいち

たから

なり。先の丸山とは諸経諸山のごとし。ただし、一々に財

しゅみせん

しゅぎい

ぐ

たから

すぐ

れい

あり。須弥山は衆財を具して、その財に勝れたり。例せば、

せけん

こがね

えんぶだんごん

およ

けごんぎよう

ほっかい

世間の金の閻浮檀金に及ばざるがごとし。華嚴経の法界

唯心、般若の十八空、大日経の五相成身、觀経の往生

より、法華経の即身成仏勝れたるなり。

須弥山は金色なり。一切の牛馬・人天・衆鳥等、この山

に依れば、必ず本の色を失つて金色なり。余山はしから

ず。一切の諸経は法華経に依れば本の色を失う。例せば、

黒色の物の日月の光に値えば色を失うがごとし。諸経

の往生・成仏等の色は、法華経に値えば必ずその義を無

う。

第三には月に譬う。衆星は、あるいは半里、あるいは一里、

はちり

じゅうろくり

す

つき

はつぴやくより

あるいは八里、あるいは十六里には過ぎず。月は八百余里な

しゅしよう

ひかりあ

つき

およ

り。衆星は光有りといえども、月に及ばず。たと

ひやくせんまんおくないしいちしてんげ

さんぜんだいせん

じっぽうせかい

しゅしよう

百千万億乃至一四天下・三千大千・十方世界の衆星これ

あつ

ひと

つき

ひかり

およ

ひと

を集むとも、一つの月の光に及ばず。いかにいわんや、一

ほし

つき

ひかり

およ

けごんぎよう

あごんぎよう

ほうどう

はんにや

つの星、月の光に及ぶべきや。華嚴経・阿含経・方等・般若・

ねはんぎよう

だいにちきよう

かんぎようとう

いつさい

きよう

あつ

涅槃経・大日経・観経等の一切の経これを集むとも、

ほけきよう

いちじ

およ

法華経の一字に及ばざらん。

いつさいしゅじよう

しんちゆう

けんじ

じんじや

むみよう

さんわく

一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑ならびに

じゆうあくごぎやくとう

ごう

あんや

けごんぎようとう

いつさいきよう

十悪五逆等の業は暗夜のごとし。華嚴経等の一切経は

やみよ ほし ほけきよう やみよ つき ほけきよう しん

闇夜の星のごとし。法華経は闇夜の月のごとし。法華経を信

ふか しん もの はんげつ やみよ て

ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照らすのごとし。

ふか しん もの まんげつ やみよ て つきな

深く信ずる者は、満月の闇夜を照らすのごとし。月無くして

ほし あ よ じょうりき もの もの

ただ星のみ有る夜には、強力の者・かたましき者などは

ぎょうふ ろうこつ もの によにん ぎょうふ かな

行歩すといえども、老骨の者・女人などは行歩に叶わず。

まんげつ とき によにん ろうこつ ゆうえん

満月の時は、女人・老骨なども、あるいは遊宴のため、

ひと あ ぎょうふじぎい しよきよう

あるいは人に値わんがごとき、行歩自在なり。諸経には、

ぼさつ だいこんじよう ほんぶ にじよう ほんぶ

菩薩・大根性の凡夫はたとい得道なるとも、二乗・凡夫・

あくにん によにんないしまつだい ろうこつ けたい むかい ひとびと おうじよう

悪人・女人乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人々は、往生・

じようぶつふじよう

ほけきよう

にじよう

あくにん

によにんとう

成仏不定なり。法華経はしからず。二乗・悪人・女人等、

ほとけ な

ぼさつ

だいこんじよう

ほんぼ

なお仏に成る。いかにいわんや、菩薩・大根性の凡夫を

つき

宵

あかつき

ひかり

はるなつ

あきふゆ

や。また月は、よいよりも 暁は光まさり、春夏よりも秋冬

ひかり

ほけきよう

しろうぞうにせんねん

まつぼう

こと

りしよう

は光あり。法華経は正像二千年よりも、末法には殊に利生

あ

有るべし。

と い

しろうもん

問うて云わく、証文いかん。

こた

い

どうりけんねん

うえ

つきしも

もん

い

答えて云わく、道理顕然なり。その上、次下の文に云わ

われめつど

のち

のち

ごひやくさい

うち

えんぶだい

こうせんるふ

く「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布し

だんぜつ

とううんぬん

きようもん

にせんねん

て、断絶せしむることなけん」等云々。この経文に、二千年

のち なんえんぶだい こうせんる ふ

そうろう だいさん

の後、南閻浮提に広宣流布すべしととかれて候は、第三の

つき たと こころ こころ こんぼんでんぎようだいし しゃく い

月の譬えの意なり。この意を根本伝教大師、釈して云わ

しょうぞう す お まっぼう ちか あ ほっけ

く「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華

いちじよう き いままさ とき とうらんぬん しょうほうせんねん

一乗の機、今正しくこれその時なり」等云々。正法千年も、

ぞうほうせんねん ほけきよう りやく しょきよう すぐ

像法千年も、法華經の利益、諸經にこれ勝るべし。しかり

つき ひかり はるなつ しょうぞうにせんねん まっぼう

といえども、月の光の、春夏の正像二千年より、末法の

あきふゆ いた ひかり すぐ

秋冬に至って光の勝るるがごとし。

だいし たと ひ たと ほし なか つき い ほし

第四の譬えは日の譬えなり。星の中に月の出でたるは、星

ひかり つき ひかり すぐ ほし ひかり け

の光には月の光は勝るとも、いまだ星の光を消さず。

につちゆう

ほし ひかりき

つき ひかり うば

日中には星の光消ゆるのみにあらず、また月の光も奪つ

ひかり うしな にぜん ほし

ほけきよう しやくもん つき

て光を失う。爾前は星のごとく、法華経の迹門は月のご

じゆりようほん ひ

じゆりようほん とき しやくもん つき

とし、寿量品は日のごとし。寿量品の時は迹門の月いま

およ にぜん ほし

よる ほし とき つき

だ及ばず。いかにいわんや爾前の星をや。夜は星の時・月の

とき しゆむ な よるあ かなら しゆむ な

にぜん しやくもん

時も衆務を作さず。夜曉けて必ず衆務を作す。爾前・迹門

しょうじ はな がた ほんもんじゆりようほん いた

かなら しょうじ

はなお生死を離れ難し。本門寿量品に至つて必ず生死を

はな よ ろっぴ りやく

離るべし。余の六譬これを略す。

ほか おお たと ほん あ

なか わた

この外にまた多くの譬えこの品に有り。その中に、「渡り

ふね え たと こころ

しょうじ たいかい

に船を得たるがごとし」と。この譬えの意は、生死の大海

にぜん きょう

いかだ

しょうせん

しょうじ

には、爾前の経は、あるいは筏、あるいは小船なり。生死

ひがん

しょうじ

か きし

つ

しょうじ

たいかい

の此岸より生死の彼の岸には付くといえども、生死の大海

わた

ごくらく

ひがん

届

れい

せけん

しょうせん

を渡り、極楽の彼岸にはとずきがたし。例せば、世間の小船

とう

つくし

ばんどう

いた

かまくら

江

しま

等が筑紫より坂東に至り、鎌倉よりいの島なんどへとずけ

とうど

いた

からふね

かなら

にほんこく

しんたん

いた

ども、唐土へ至らず。唐船は必ず日本国より震旦国に至る

さわ

な

い

まず

たから

え

に障り無きなり。また云わく「貧しきに宝を得たるがごと

とううんぬん

にぜん

くに

ひんこく

にぜん

ひと

がき

し」等云々。爾前の国は貧国なり。爾前の人は餓鬼なり。

ほけきょう

たから

やま

ひと

と

ひと

法華経は宝の山なり。人は富める人なり。

と

い

にぜん

ひんこく

しょうもん

問うて云わく、爾前は貧国という証文いかん。

こた い じゆきほん い う くに きた
答えて云わく、授記品に云わく「飢えたる国より来つて、

だいおう ぜん あ とうらんぬん
たちまちに大王の膳に値うがごとし」等云々。

によにん おうじよう じようぶつ だん
女人の往生・成仏の段。

きようもん い によらいめつ のち のち ごひやくさい うち
経文に云わく「もし如来滅して後、後の五百歳の中に、

によにん あ きようてん き すなわ あんらくせかい あみだぶつ しゆぎよう
もし女人有つて、この經典を聞いて、説のごとく修行せ

ば、ここにおいて命終して、即ち安樂世界の阿弥陀仏の

だいぼさつしゆ いによう じゆうしよ い れんげ なか ほうざ
大菩薩衆に困遶せらるる住処に往つて、蓮華の中の宝座の

うえ しょう とうらんぬん
上に生ず」等云々。

と 問うて曰わく、この経きよう、この品ほんに殊ことに女人にょにんの往生おうじようを説く。
なん ゆえ あ 何の故か有るや。

こた い ぶつ い はか 答えて曰わく、仏意測りがたし。この義ぎ、決けつし難がたきか。

ひと りようけん くわ ただし、一つの料簡を加え、女人は衆罪の根本、破国の

みなもと ゆえ ないげてん おお いまし なか げてん 源なり。故に、内外典に多くこれを禁む。その中に、外典

ろん さんじゆう もう をもつてこれを論ぜば、三従あり。三従と申すは、三つ

いち よう ふ ぼ したがうというなり。一には幼にしては父母に従う。嫁し

おっと したが お こ したが さんしようあ せけん ては夫に従う。老いては子に従う。この三障有つて世間

じぎい ないてん ろん ごしようあ ごしよう 自在ならず。内典をもつてこれを論ぜば、五障有り。五障

いち ろくどうりんね あいだ なんし だいぼんてんのう な

とは、一には六道輪回の間、男子のごとく大梵天王と作ら

に たいしやく な さん まおう な し てんりん

ず。二には帝釈と作らず。三には魔王と作らず。四には転輪

じょうおう な ご つね ろくどう とど さんがい い

聖王と作らず。五には常に六道に留まって三界を出でて

ほとけ な ちようにちみようさんまいきよう もん ごんじきによきよう い

仏に成らずへ超日明三昧経の文なり。銀色女経に云わ

さんぜ しょうつ まなこ だいち だらく ほうかい もろもろ

く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも、法界の諸の

によにん なが じょうぶつ ごな とううんぬん

女人は永く成仏の期無し」等云々。

ぼんぷ けんおう しょうにん もうご 樊 於 期

ただし、凡夫すら賢王・聖人は妄語せず。はんよきとい

もの 荊 軻 くび 季 札 もう ひと じよくん

いし者は、けいかに頸をあたえ、きさつと申せし人は、徐君

つか つるぎ 懸 やくそく たが もうごな ゆえ

が塚に剣をかけたたりき。これ、約束を違えず、妄語無き故

この舌、うすくひろくながし。あるいは面におおい、あ

した 薄 広 長 おもて 覆

かみぎわ 至

ぼんてん

した うえ いた

るいは髮際にいたり、あるいは梵天にいたる。舌の上に五つ

え いんもん

した いろ しゃくどう

した

の画あり。印文のごとし。その舌の色は赤銅のごとし。舌

した ふた

たま

かんろ ゆじゆつ

ふも うごかい

とく いた

の下に二つの珠あり。甘露を涌出す。これ不妄語戒の徳の至

ほとけ

した

さんぜ

しよぶつ

おんまなこ

すところなり。仏この舌をもつて、「三世の諸仏の御眼を

だいち

お

ほうかい

によにん

ほとけ

説

大地に墮とすとも、法界の女人は仏になるべからず」とと

いっさい

によにん

よ

ほとけ

成

たも

かれしかば、一切の女人はいかなる世にも仏にはならせ給

覚

そらら

によにん

おんみ

うまじきところおぼえて候え。さるにては、女人の御身を

う

たま

后

三

后

くらい

備

受けさせ給いては、たといきさき・さんこうの位にそなわ

何

ぜんこん

ぶつじ

由 無

りてもなにかはすべき。善根・仏事をなしてもよしなしと

覚

そうら

ほけきよう

やくおうほん

によにん

こそおぼえ候え。しかるを、この法華経の薬王品に女人の

おうじよう

そうら

ふしぎ

そうろう

か

往生をゆるされ候いぬること、また不思議に候。彼の

きよう

もうご

きよう

もうご

いっぽう

もうご

経の妄語か、この経の妄語か、いかにも一方は妄語たる

いっぽうもうご

いちぶつ

にこん

しん

がた

べきか。もしまた一方妄語ならば、一仏に二言あり。信じ難

きことなり。

むりようぎきよう

しじゆうよねん

しんじつ

あらわ

ただし、無量義経の「四十余年にはいまだ真実を顕さず、

ねはんぎきよう

によらい

こもう

ことばな

しゅじよう

涅槃経の「如来には虚妄の言無しといえども、もし衆生、

こもう

せつ

よ

し

も

おも

虚妄の説に因ると知ろしめさば」の文をもつてこれを思わ

ほとけ によにん おうじよう じようぶつ

と たま

ば、 仏は女人は往生・成仏すべからずと説かせ給いける

もうごき

みようほけきよう もん

せそん ほうひさ

は、 妄語と聞こえたり。 妙法華経の文に「世尊は法久しく

のち かなら まさ しんじつ と

みようほけきようないしみな

して後、 要ず当に真実を説きたもうべし」「妙法華経乃至皆

しんじつ

もう もん

おも

によにん

これ真実なり」と申す文をもつてこれを思うには、 女人の

おうじよう じようぶつ けつじよう

と

ほけきよう もん

じつご

往生・成仏は決定せりと説かるる法華経の文は、 実語・

ふもうごかい み

不妄語戒と見えたり。

せけん けんじん

いちにん

こ

ふしぎ

とき

世間の賢人も、 ただ一人ある子が、 不思議なる時、 ある

とが あ とき なが こ

いは失有る時は、 永く子たるべからざるの理、 起請を書き、

せいごん た

つい みようじゆう とき のぞ

あるいは誓言を立つるとも、 終の命終の時に臨んでこれ

ゆる

を許す。しかりといえども、

けんじん

賢人にあらずとは云いわす。ま

もうご

もの い

た妄語せし者とも云わす。

ほとけ

にぜんしじゆうよねん

あいだ

ぼさつ

仏もまたまたかくのごとし。爾前四十余年が間は、菩薩

とくどう

ぼんぷ

とくどう

ぜんにん

なんしとう

とくどう

ゆる

の得道、凡夫の得道、善人・男子等の得道は許すようなれ

にじよう

あくにん

によにん

とくどう

ゆる

ども、二乗・悪人・女人などの得道はこれを許されず。

ゆる

似

さだ

あるいはまた許さるるににたることもあり。いまだ定めが

ほとけ

せつきようしじゆうにねん

おんとししちじゆうに

たかりしを、仏の説教四十二年すでにすぎて御年七十二

まかだい こくおうしやじよう

ぎしやくつせん

もう

やま

ほけきよう

説

摩竭提国王舎城の耆舎崛山と申す山にして法華経をとか

たも

思

とき

むりようぎきよう

もう

きよう

と

たも

せ給うとおぼせし時、まず無量義経と申せし経を説かせ給

う。
無量義経むりようぎきようの文もんに云いわく「四十余年しじゅうよねん」云々うんぬん。